巻頭言

第77巻の巻頭にあたって

全国国立病院長協議会　会長
国立病院機構名古屋医療センター　院長　長谷川　好規

IRYO　Vol. 77　No. 1（3）2023

新年，明けましておめでとうございます．「医療」第77巻の巻頭にあたり，全国国立病院長協議会会長として一言ご挨拶申し上げます．

今回，あらためて雑誌「医療」の内容を見てみようと図書室に向かいました．残念ながら名古屋医療センターの図書室には第39巻（1985年）から第68巻（2014年）のみが保管されており，第１–38巻や第68巻以降は手に取ることができませんでした．しかし，便利なもので国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナルプラットフォーム「科学技術情報発信・流通総合システム」（J-STAGE）で第１巻（1946年）から第62巻（2008年）までが検索でき，医学文献サービスのメディカルオンラインのウェブサイトで第19巻（1965年）から最新版第76巻（2022年）まで検索できました．ちなみに，第１巻の最初の論文は「発疹チフス」の講演会記録でした．

過去の巻頭言で雑誌「医療」の在り方につい て何度か取り上げられました．想像するにコンピューターで文献検索が始まる1990年頃までは，医学の情報量も限られており「医療」は重要な役割を果たしていたと思います．その後のインターネットの発達と急速な情報化社会の到来の中で，情報提供の在り方が変わるとともに，膨大な情報量により逆に，かつての貴重な情報源が埋もれてしまっていると思います．一方で，情報過多の時代を生き延びるためには，質の担保や標準的な科学誌編集ルールに則り，それを発信することが必要となります．振り返って雑誌「医療」の強みを考えてみると，多くの雑誌が専門性に特化してゆくなかで，臨床に関わる多職種が関わり，チーム医療の実践をそれぞれの職種の立場で報告しており，雑誌としての独自性が高いと考えます．特に，アジアを中心とする国々の医療関係者にとっては知り得たい情報です．今後，雑誌「医療」においてもタイトルと抄録は英語版を加え，日本語圏以外の読者の論文へのアクセスを誘う取り組みを検討することも一計です．

さて，全国国立病院長協議会としても国立病院機構の第２のミッションである研究について，構成員のリテラシーを高めたいと考えています．関連する委員会として国立病院総合医学会推進委員会や臨床試験委員会が想定されます．これまで，国立病院機構病院の共同研究から，ガイドラインに採用される研究や治療薬の開発など，素晴らしい研究が報告されています．論文の２重投稿の問題などから，雑誌「医療」への掲載が回避されることもあると思います．多くの学会誌ではこの問題に対して，総説やreview articleとして主題の背景や現状の理解をまとめながら，研究報告を紹介してもらう取り組みをしています．研究者の業績にもなりますので執筆のモチベーションアップにも繋がります．

さて，新型コロナウイルス感染症も４年目に突入し，遅ればせながら日本においてもコロナと共存する日常への法整備が進められています．医療現場が診療体制を2019年以前の状況にどこまで戻すことができるかが課題です．その理由は，感染力が季節性インフルエンザや風邪ウイルスと次元が異なること，また，変異株の出現スピードです．今こそ，医療現場でのチームの叡智が求められており，その情報共有の重要な場所として，雑誌「医療」が役割を果たせることを祈念しています．